一　主に結ばれた苦労は無駄にならない

コリントの信徒への手紙一　一五章四二節―五八節

二〇〇五年八月二一日礼拝説教　　　秋吉隆雄　牧師

キリスト教の信仰はイエス・キリストの十字架と復活に集中しています。イエス・キリストの十字架。これは、歴史家の書き残したものに、ナザレのイエスは十字架刑に処せられたと記されていますから歴史的事実であります。この十字架刑が起こったことについて四つの福音書がその理由を伝えています。イエス・キリストは当時のユダヤ教社会において人間とみなされずに社会から排除されていた人々、地の民と呼ばれていましたけれども、地べたを這いずり回って生きているような人々、彼らに対して神にあって生きよと人間回復の宣言とその実態を示されて、それが神の国であると告げられました。このことは当時の宗教家たちにはユダヤ教体制を危うくするものとみなされて、危険人物とされました。当局はイエス・キリストを追い詰めて無法なかたちで死刑を宣告し、総督ピラトの手で十字架刑に処していったわけであります。この歴史的事実は誰が読んでも分かる事柄であります。ところが聖書は、このイエス・キリストの十字架はすべての人の罪の赦し、神との和解の出来事であったと告げています。ナザレのイエスが十字架で無残に殺されたこの出来事がわたしの罪の赦し、神との和解、神と共に生きるわたしの救いであると。この論理は飛躍しています。二千年前のイエスと現在のわたしがどうして関わり合えるのか。関係ないというのが理性的判断でありましょう。しかし、聖書は、イエス・キリストの十字架はあなたの罪の赦しであり、神との和解であると告げています。これは理性を超えた信仰において受けとめられることでありますが、その理性を超えた信仰において受けとめられることを可能にするのがイエス・キリストの復活であります。十字架の死の中から復活した事実から、十字架はわたしの罪の赦しであり、神との和解の出来事であったと承服させられる。ですから、十字架の出来事は復活の光の中からその真意を受けとめられるわけであります。そこで、では復活とは何であったのか。仮死状態から息を吹き返すことはしばしばあることでありますが、十字架上で息絶えて槍で刺されて死んだ者が復活する。こういう事はありえないことですから、イエス・キリストの復活はどういうことで、復活は何をあらわしているのかと、こういう

ことが問題になるわけです。ですから、イエス・キリストの復活に対して実に多様な理解そして信仰が表されています。人それぞれ違うと言っていいくらい多様であります。けれども、キリスト教は復活信仰に根源的な命を保ってきたことには間違いない事実であります。

今日与えられました御言葉はコリントの信徒への手紙 一 一五章の後半四二節からです。「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。『最初の人アダムは命のある生き物となった』と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです。最初に霊の体があったのではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。最初の人は土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。」

この一五章はパウロがイエス・キリストの復活について力強く論じた復活信仰の根幹をなす箇所であります。今日はこの箇所から復活信仰を中心に申し上げたいと思います。イエス・キリストの復活については四つの福音書が伝えています。一番最初に書かれたのはマルコ福音書です。これは紀元後七十年頃、イエス・キリストの十字架と復活から四十年過ぎた頃に書かれた福音書です。このマルコ福音書は、「イエス・キリストは復活した」と伝えていますけれども、その復活したイエス・キリストとは誰とも出会っていないのです。「ガリラヤ、イエス・キリストが初期に伝道していたガリラヤに行きなさい、そのガリラヤで復活したイエス・キリストにお逢いすることができる」と記しているだけであります。マルコ福音書から十数年の後に書かれたマタイ福音書とルカ福音書は、「復活したイエス・キリストは女性達に出会った。そしてイエス・キリストの弟子達にも出会った」とその出来事を伝えています。最後、紀元後百年頃書かれたヨハネ福音書は実に詳しく多様に、イエス・キリストの復活の様を伝えています。これらを読み比べてみると、その記述において様々な矛盾があります。論理的な一貫性がないわけです。福音書の記者達は自分の信仰に基づいて多様に復活を伝えたと理解す

るのが自然であります。今日与えられましたコリント書十五章、これは勿論パウロが書いたものでありますが、この手紙は紀元後五十五年頃、イエス・キリストの十字架と復活から二十五年後位に書かれた手紙であります。ですから、復活に関して最初に書いたのはパウロなのです。パウロが聖書の中で一番先にイエス・キリストの復活とその福音的意味を語っているわけです。復活証言というものは年とともに拡大解釈されて伝道的に用いられてゆきます。そういう意味において最初に記述したパウロの言葉は信頼に値するのは当然であります。そのパウロはこう言うのです。「イエス・キリストは事実復活した」と。「十二弟子に復活したイエス・キリストは現れた」と。「また五百人以上の兄弟達、そして、イエス・キリストの弟のヤコブ、さらに教会を迫害していたわたしパウロにも現れた」と復活の事実を力説しています。パウロにとって復活したイエス・キリストとの出会いが決定的な出来事、救いであったわけです。けれども死人の復活などはありえない事でありますから、多くの人々から否定されました。その否定する彼らに対してパウロはこう語っています。「もし、キリストが復活しなかったのであれば、わたしの宣教はむなしく神の偽証人となる」と言っています。そしてこうも言っています。「この世の生活で、キリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人々の中で最もみじめな者です」。キリストに望みをかけているだけと言うのは、これはナザレのイエスは素晴らしい方で、学び、習う模範の教師である。そういう人間的レベルだけで見るという意味であります。「イエス・キリストを立派な先生として見るだけであるならば、この世の中で最もみじめな者である。しかし、事実はイエス・キリストは死者の中から復活し、死を突き抜けて生きておられる神キリストである。この信仰がわたしたちの信仰である」とパウロは語っているわけです。そこで、ではその死者からの復活はどんな体であったのかということが問題になるわけです。これに答えようとしているのが今日与えられました御言葉であります。使徒信条では〈身体〉のよみがえりと言います。〈身体〉、これはギリシャ語では〈ソーマ〉と言います。この〈ソーマ〉は肉の身体ではありません。肉は〈サルクス〉と言います。パウロはイエス・キリストの身体の復活を語っていますが、まずはっきりさせておきたいことは、キリストの復活はこの肉体の復活ではないということです。もちろん教会の歴史の中でイエス・キリストの復活を肉の復活と信じている人は大勢いますし、今日も沢山いるでありましょう。けれども、パウロは肉の復活ではないと語っています。これは、

福音書からも言えることであります。様々な矛盾がありますね。これらは、肉、肉体そのものの復活ではないと証言していると理解することができます。これらは、肉、また、肉体が復活したのであるならば、その後イエス・キリストの肉体はどうなったのかという議論になります。キリストは日本に来て青森県で伝道して、青森県で死んだ、キリストの墓が青森県にあるという話がありますが、このことを受けとめる人はいないでありましょう。肉の復活はない、このことは確認してよいと思います。パウロはこのコリント書の中でこう言っています。「自然の命の体と霊の体」。まず自然の命の体、これは朽ちるもの、消滅するものです。アダムが土のちりで造られたように、これは地に属するもので、この自然の命そのものが、すなわち肉が復活するということはないのです。外なる人は日々衰えて、消滅に向かって行きます。わたしたちは自然の命の体として蒔かれ生かされています。ところがこの自然の命の体から霊の体に復活すると言っています。霊の体と言っています。霊の体の復活がパウロの信ずる復活信仰の核心であります。この霊の体、これは一体何なのかと言うことです。分からないんですよ。分からなくてもよいんですね。キリストの霊の体の復活は、相対化できない、相対化できないということは言語化あるいは理性化できない永遠にかかわる秘儀であるということです。けれども、このイエス・キリストの復活において決定的なことが起こったんです。例えば、ペトロですが、彼はイエス・キリストを愛し、懸命に従っていました。ところが、ゲッセマネの園で、エルサレム神殿当局に捕縛された時に、ペトロは逃げ出したわけです。これは、身の危険を感じてペトロがそうしたわけですけれども、ペトロの思いは理解することはできます。ところが、復活の主イエス・キリストに出会ってからのペトロは別人であります。エルサレムの最も権威ある、別な言葉で言うならば、最も恐ろしい最高法院でペトロは堂々とキリストの復活証言をしています。聞いていた議員達はペトロたちが無学な普通な人であると知って驚いたとあります。その後のペトロの生涯も福音書が記しているペトロとは全く別人でありますね。これは復活したイエス・キリストに出会ってから変えられたわけであります。パウロにおいてもそうですね。彼は十字架で死んだイエスをキリストと信じるクリスチャンは赦せないと、迫害の息をはずませていたわけでありますが、そのパウロが復活のイエス・キリストに出会ってからは全く生まれ変わって、復活の福音を命がけで伝道しています。霊の体に復活したイエス・キリストに出会う。これはですね、言語化できませんけれども、永遠に

向かって、死を突き抜けた永遠に触れたことで、出来事として人間を全く変えて行く。彼らの復活体験、復活信仰はここに根拠があるわけです。私はこの霊の体というのは、人間の側、地に属するものでなくて、向こう側から、神の側からの呼びかけ、または永遠を見る視点へと引き上げられる出来事だと信じています。このキリストの復活信仰に関してあくまで人間的レベルで、理解して説明しようとする人がおられますが、その努力は買いますけれども、私は永遠からの呼びかけ、それに応える、それに全身を掛けて信じる。そういう信仰だと理解していきます。十二弟子の一人でトマスという人は、大変疑い深い人でした。ですから彼は、死人が復活するということはあり得ないと言い張ったわけであります。ところがその彼に、復活したイエス・キリストが現れて、十字架で釘打たれた手と、槍で刺されたわき腹を見せながらトマスに対して、「あなたの指を当てて手を見、あなたの手を伸ばしてわたしの脇腹に入れなさい。」と迫ります。この時にトマスはただ、「わたしの主、わたしの神よ」と叫ぶのですね。問題はこの後です。イエス・キリストがトマスに対して、「あなたはわたしを見たから信じたのか、見ないのに信じる者は幸いである」と語られています。この記述は、ヨハネ福音書を書いたヨハネ教団の信仰の現れですね。教会に行きますと、「イエス・キリストは復活した。わたしはその方を見た」とこう言うわけです。それを聞かされた人は、「それじゃ、わたしにも復活したイエス・キリストを見せてくれ」と当然言うわけですよ。その彼らの問いに対して、「復活の主イエス・キリストを見る必要はない。見ないのに信じる者は幸いである」と返答した言葉がこのイエス・キリストの言葉なのです。復活したイエス・キリストをわたしたちはこの目で見ることは出来ないのです。けれども、信仰において死から復活したイエス・キリストを受け入れて、この方と共にある生を体験する。向こう側、永遠の側からの呼びかけに対して「然り」をもって受け入れる。これが復活信仰であります。この復活信仰は、ペトロやパウロの生涯に見られるように、わたしたちの生活においても具体的な生活の中で、体験させられる事であります。

このことをパウロは今日の聖書の後半に記しています。五十節から最後の五十八節までをご覧いただきたいと思います。「兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変え

られます最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。『死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。』死のとげは罪であり、罪の力は律法です。わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」

パウロは、肉と血、サルクスですね。「このサルクスが神の国を受け継ぐことはない」と言っています。「朽ちる肉が朽ちない復活をすることがない」と繰り返し言っています。そして、神話的表現で、終末信仰を神秘として語っていますね。人は死ぬと眠りにつくと言われています。けれども、歴史の終りにラッパが鳴ると言うのです。その時に死者は一瞬にして復活し、朽ちて死ぬべきものが朽ちず死なないものを着ると言っています。「終末の時、キリストの復活と同じ姿に変えられる。」。このパウロの言葉も論理的には理解することはできません。けれども、聖書の信仰は歴史には終りがある。それを「ラッパが鳴るとき」と言っているわけでありますが、神による歴史の完成のときがある。そのときに復活のキリストの命、それを着るものとされる。これは信仰における望みであります。この望みを確証してくださったのが、キリストの復活の事実であります。ですから、「死は勝利にのみ込まれ、死のとげはキリストの復活によって完全に無力にされた」と言うのです。わたしたちは、土の塵で生まれた肉、サルクスを生きているわけですけれども、そのサルクスは滅んで行きます。けれども、キリストが死の中から復活されたので生と死を越えて神と共にある祝福がわたしたちのものとされている。死は人間を打ち倒す絶対的なとげではなくて、キリストの復活の命の中に包まれている。そして、そこからパウロは、わたしたちの現実生活へと筆を進めています。「律法、戒めが罪を見出し、その罪が人間に死をもたらす」と言っています。ここで言われています死とは、サルクス、肉の死ではありません。罪によって人生を放棄し、絶望するという死であります。肉体的には生きているけれども、

霊において死んでいる、そう表現される虚無性、この死です。わたしは何のために生きているのか、生きていたってしかたがないという虚無性ですね。そして、わたしたちはいかにしばしばこの死の虜になっていることでしょうか。パウロは「イエス・キリストの復活を信じる」、「そこでは神の命に与る喜びが湧き上がってくるのだ」と言っています。ですから、続いてこう語るわけです。「こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」生きることは苦しい、人生は空しい。そういう思いに駆られているわけですけれども、そうではない。「イエス・キリストは死人の中から復活し、神の永遠の命をあなたがたに与えていて下さっている。」この事実に立つときに、わたしたちが味わう苦労は決して無駄ではなくて、神にあって有益有効なものとして、わたしたちを生かして下さる。わたしたちのささいな日常の一挙一動、これらが永遠の神と結び合っている。わたしたちの現実生活はキリストの復活のゆえに実に神さまに根拠を持っている。とこう言うわけです。このことをパウロは逆の言葉で、「死者が復活しないとしたら、『食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか』ということになります」と言うわけです。復活して神がおられるということを証ししたわけですけれども、それを否定して神がないと言うのであるならば、それは死に向かって流れ込む虚無でしかない。それならば食べ飲み人生を享楽しよう、これ以外に生きる意味がないと考えてしまうではないかと言うのです。しかし、事実は、キリストは復活した。神は生きておられる。この復活を信じて神と共にある人生、これがわたしたちの救いではないか、と言うのです。初めに言いました、十字架は罪の赦し、神との和解の出来事である。この福音はキリストの復活の光から全くそのとおりですと承服させられていきます。わたしたちの生がどんなに辛く、悲しく、苦いものであったとしても、キリストの復活によって、それらすべてが無駄になることなく益となる、神さまの祝福の中に置かれている。これを信じるということがキリストの復活信仰であります。主に結ばれ、主の業に励む。このことがわたしたちの信仰であり、このことの中にわたしたちの救いが約束されていると。これがパウロの語る復活信仰のメッセージであります。